昭和二十九年に於ける国語学界の展望

一、国語史・国語学史

築島裕

昨年度の本誌の展望欄でも筆者の一人が述べて居られたやうに、最近のやうに刊行物が尨大な数に上って来ると、その全部に目を通すことは個人の力では殆ど不可能に近いことになってしまった。況やその一篇一篇を熟読してその上で適正な批評を物するといふやうなことをしてゐたら、それだけでも毎日々々の生活の時間はすべて費されてしまひ、他の仕事をやる暇は全然無いことになるであらう。私は標題のやうに「国語史」「国語学史」の分野をお引き受けしたのであるが、この一年間にこの部門だけでも少くとも百数十篇の論文と数冊の大著が刊行されてゐる。私は、自分の手許に持ってゐるものと東大国語研究室・同国文学研究室・国立国語研究所に到着してゐるものとを主とし、その他気付いたものを個人的に借覧したりして、この稿の材料を集めたのであるけれども、恐らくなほ他に相当数の資料が漏れてゐるに違ひないと思ふのである。それにつけても一般に目に触れ難い紀要などに御執筆せられた折には、その抜刷だけでも本誌編輯部に御寄贈賜はりたいことを切に願ふものである。

さて、国語史・国語学史と云っても、その範囲は誠に広い。私のやうに斯の道に携はってから未だ日の浅い弱輩にとっては、これらの諸論文を通読すること、更にそれを完全に理解し批判することは正に至難のわざである。編輯部の方針は、書目列挙主義でなくして、重点的に批判論断することを希望して居られるけれども、非力の致す所、とてもさやうな目標には程遠いやうな駄文になってしまった。著者各位への非礼は何卒お許し願ひたいのである。自分の至らぬ点を棚に上げるわけではないが、今後は、更に細かく部門を区分して、例へば国語史でもそれを更に「上古」「中古」「中世」「近世」などのやうに分けて、各部門の専門研究者に執筆を願ふ方がいゝやうにも思はれるのである。

予算等の関係からか、昭和二十九年の日付ある刊行物が、昭和三十年も半に近いこの頃（六月）になってもまだぽつ〳〵と届けられる。そのやうな類も、機械的に日付を基としてすべて二十九年度のものとして取上げることにした。又口頭発表だけのものは一応省略させて頂いた。

一、総　説

明治時代以来、国語史の研究は国語学の中心的課題を為して来た。現在では、国語史以外の研究は、以前よりも相当多くなったが、それでも尚、国語史研究の文献は他部門に比べれば一番数多いやうに思はれる。

語学は概して地味な研究であって、一部の文学の研究のやうに、世相の動向を直接に反映することは尠い。殊に国語史や国語

学史の研究はさうであらう。たゞ、このやうな地味な根気仕事による業績が多数公刊されるやうになったことは、世情が安定したことを間接に示すものではあらう。

偶然なことかも知れないが、本年度のこの分野の研究の中では、国語史の総論・総記のやうなものと、中古訓点語関係の業績が比較的多数目につくやうである。国語史の通観としては、「国文学解釈と鑑賞」十月号が「日本語の歴史」と題する特集号を編み、大野晋氏（「日本語の黎明」）中田祝夫氏（「貴族時代（後期）の日本語」）土井忠生氏（「武士の時代の日本語」）吉田澄夫氏（「平民の時代の日本語」）松村明氏（「東京語の成立と発展」）の諸篇が掲載されてゐる。国語史の通観書としては昭和二十六年に改訂版を出した国語学会編「国語の歴史」が最新のものであったが、各時代とも今度のとは筆者が違ってゐるし、前のは概説的・網羅的記述であるのに対して、今度のは論考的・重点的記述であるから、彼此見合はせて最近の国語史の研究水準を窺ふのに恰好であると思ふ。就中大野氏の論は考古学人類学等の最近の研究結果をも勘案した日本語系統論が主であって、この結論は、今後研究方法の点と共に議論の種とされるであらう。それにしても、前者の各論文に「貴族時代」「武士の時代」「平民の時代」のやうな題目がついてゐるが、いかにも取って付けたやうで、内容と少しもマッチしてゐない。編集者の意図は戦後の歴史学研究との関連を重視したいと思ったのかもしれないが、国語史研究の現段階としては、社会史との連関的な研究は殆ど無に等しいもので、かやうな現状でこんな題目は無くもがなである。しかしその内容は諸篇ともすべて新資料も多く見え、「清新」の感が大変強いものである。

国語史全般に関する論考では、亀井孝氏「国語の変遷と歴史」（国語学十七輯、八月）がある。国語のハ行音の移り変りを例にとり、この現象を音韻論的・音声学的に説明しただけでは未だその言語の歴史とはならず、その移り変りに対して、社会がどのやうに抵抗意識が生じ、どのやうに古形が後退したかを捉へて始めて歴史となるといふ論旨のやうである。又、大野晋氏「国語史をどのやうに把へるか」（国語学十九輯、十二月）は、東大国語研究室会での発表の原稿と、その発表の後で行はれた討論を併載したものである。大野氏の立場は、言語表現者は、規範・権威を媒介として相手に自己の意志・思想を思明し、聞手もまたその規範・権威を媒介として相手の表現を理解する。しかも表現者の欲望が権威に抵抗してそれを圧倒して新しい権威を立てる、これが歴史である、との如くである。

それから、本年の注目すべき事柄は、以前に一度刊行されたが今日ではもはや入手困難になり、古本の値段が途方もなく高くなってしまったやうな研究書や古辞書の複製本の類が、再び刊行されて一般の人の手に入り易くなったことである。これは、研究者・研究機関が増加したことにもよるだらうが、何といっても経済界が安定して来た為と見られるであらう。研究書の類では山田孝雄氏「奈良朝文法史」（四月、宝文館）、同「平家物語の語法」（十二月、同）など、辞書・索引・本文の類では正宗敦夫氏編「万葉集総索引」（「万葉集大成」所収、平凡社、本年七月で本文完刊）「倭名類聚抄（元和本、本文と索引）」（三月、風間書房）、「類聚名義抄（観智院本、本文のみ）」（五月、同）、「伊呂波字類抄（十

巻本、上巻のみ)」(六月、同)、池田亀鑑博士「校異源氏物語」(「源氏物語大成」所収、中央公論社、本年二月で本文完刊)などがある。

池上禎造氏「言語生活研究の一意義」(国語国文、四月)は、時枝博士の提唱以来論議されるやうになった「言語生活史」に関しての見解も多く含まれてゐる示唆に富む文である。又、国語音韻史の各時代に亘る論文としては、金田一春彦氏「東西両アクセントのちがいができるまで」(文学、八月)、がある。これは、東京式アクセントは京阪式アクセントから変って出来たものではないかといふことを、石川県能登島およびその周辺地方のアクセントの分布状態から推測したものであって学界に話題を投げかけたものである。

又、文法史全般に亘るものに、浜田敦・塚原鉄雄・井手至三氏の共作(井手氏執筆担当)に成る「国語副詞の史的研究」(大阪市立大学国語学研究調査冊子一、九月)がある。副詞「なかなか」の用法を上古から現代に至るまでの意味用法の変遷を歴史的に究明したものである。副詞研究は文法研究の中でも殊に問題を含んだ分野であって、その史的研究は従来手薄であったやうに思ふ。共同研究といふ新方法と相俟って、今後の研究の発展が期待される。

国語史研究には必ずつきまとふ文献処理方法について、中田祝夫氏の入門講座がある(「文献の取扱い方」、国語学十八輯、十一月)、訓点関係の文献が多いが、中田氏の新見が多く見える。

二、上　代

日本語系統論に関しては前述大野氏の論あり、又亀井孝氏「「ツル」と「イト」—日本語の系統の問題を考へる上の参考として—」(国語学十六輯、三月)は、従来朝鮮語と関係ありと説かれて来た「ツル」は、同義語「タヅ」より新しく出来た語形と考へ得るから、比較の対象とすべきでないとし、又「イト」は朝鮮語の mi と関係あるべきことを想像して、日本語も朝鮮語も文献時代以前に既に大きな音韻変化を遂げてゐたことを予想したもの。(本稿については村山七郎氏の批判がある。国語学二十輯、三十年三月所載。)又、宮良当壮氏「琉球民族とその言語 —金関教授の臆説批判—」(民族学研究十八巻四号、十二月)は琉球語がインドネシヤ語に起源づけた説に対する反駁。日本語系統論とも間接があるから附言する。上代の特殊仮名遣関係では先づ大野晋氏「上代語の訓詁と上代特殊仮名遣」(万葉集大成訓詁篇上、八月)、同「奈良時代のヌとノの万葉仮名について」(万葉十二号、七月)とが挙げられる。前者は概説でありながら、注目すべき新見を多く蔵する。後者はノが甲乙二類に分れ、ヌは一類であって二類に分れないことを、万葉仮名の用法や漢字音の音価の面から論断したもの。木下正俊氏「脣内韻尾の省略される場合」(万葉十号、一月)は〔m〕〔p〕で終る漢字の韻尾を省略して万葉仮名として用ゐる際には必ず次の字の頭子音が唇音の場合に限ることを実証したもの、又鶴久氏「同音節反覆の場合の用字法について」(万葉十二号、七月)は、例へば「ツヽ」を「都追」のやうに異字を連ねるか「都都」のやうに同字を重ねるかが、巻により異同あることを論じたものである。又、宮嶋弘氏「オの万葉仮名」(立命館文学一一五号、十二月)がある。「意」の字は推古朝遺文や古事記に多く、古代風な用法であり、万葉では憶良・家持等一部の作者が古式を模

倣して用ゐるに過ぎぬとの論。大野晋氏「上代仮名遣の研究」（二十八年刊）の書評を亀井孝氏が為したのが「言語研究」（二十五号、三月）にある。他に類少ない強い筆である。

音韻を中心的に扱ったものには、村山七郎氏「古代日本語の二、三の音韻について」（国語学十七輯、八月）がある。「露出形と被覆形との関係についての一解釈」「古代日本語における母音の後進的影響」「古代日本語のa—öの交替について」の三論から成り、何れも他の前説の否定である。しかし村山説も、なほ今後の批判を俟つべきものではないか。又、亀井孝氏 "On the Authenticity of On-Readings in Sino-Japanese"（一橋大学紀要五巻一号、十月）は、シナ語音韻史研究に際しては、日本に残った漢字音を援用する時には、日本語自体の中における諸類型や歴史的移り変りを考慮すべきことを、古代の実例を引きつつ述べた英文の論文。

上代語の文法論では、先づ福田良輔氏の二論文「古代語法存疑—エ列音の連体形—」（文学研究四十八輯、三月）と「同（その二）—久語法について—」（同五十輯、十二月）とがある。この二文は、東国歌「カナシケ児」等のケを形容詞連体形語尾の一形と見、すべての連体形にクが付いて所謂ク語尾が成立するとする岡倉由三郎氏説に賛したもの。金田一京助・大野晋両氏の連体形＋アクの説を批判してあるが、この反論は少し力が弱いかと思ふ。木下正俊氏「「けめかも」攷」（国語国文、三月）は、「醸みけめかも」のやうな例を「けめばかも」と解するを非とし、一種の混淆的変格用法であらうとする論。春日和男氏「指定表現の様式 —発生過程よりの考察—」（文学研究五十輯、十二月）は、指定表現の文末様式が、無表記→ゾ→ナリと変化したとし、上代文献及び訓点資料を援用した論である。杉井鈴子氏「助詞「へ」の成立」（国語学十九輯、十二月）は、助詞「へ」が上代では「辺」の意の体言だったと論じたもの。諏訪嘉子氏「万葉集における助詞「を」」（万葉十三号、十月）は「を」を感動・格提示・接続に分ち論じた。又三吉陽氏「「ずあり」「ざり」「ず」についての一考察」（愛媛国文研究三号、三月）は「ずけり」「ずき」等を中心に詳論してある。

語彙では、先づ単行本に亀井孝氏 "Chinese Borrowings in Prehistoric Japanese"（太古の日本語とシナ語、十二月、吉川弘文館、英文）がある。B. Karlgren 氏の説の批判が中心になってをり、極く古く輸入されて日本語となったシナ語は、K氏のいふほど多くなく、まず可能性が考へられるのは郡（クニ）・絹（キヌ）・馬（ウマ）・梅（ウメ）ぐらいであらうとされる。

次に論文では服部四郎氏「言語年代学」即ち「語彙統計学」の方法について—日本祖語の年代—」（言語研究二十六・七合併号、十二月）が注目される。語彙年代学（glotto chronology）即ち語彙統計学（lexical statistics）とはアメリカの学者 Swadesh の「如何なる言語においても一般的な日常語彙はほゞ一定の速度で変化する」という仮説の許に立てられた新説で、本論文ではこれを日本語と琉球語とに適用し、東京・亀山・京都・首里の諸方言と日本上古語とを比較し統計を取ったもの。その結論として、首里方言と京都方言とが分離したのは現在から一四五〇乃至一七〇〇年前であるとされる。日本語系統論上誠に重大な結論であるが、この Swadesh の仮説自体が、日本語のやうに特殊な文化環境の下に変遷した言語に適用しうるものかどうかが問題になるのでは

なからうか。又、村山七郎氏「古代日本語語彙二、三の比較的考察」（民族学研究十八巻四号、十二月）があり、クハシ、ナキ、ナミタ、シコ等の古語を論じてある。又、佐竹昭広氏「「火気」・「如」の訓など」（万葉十二号、七月）はホノケ・カクと訓むべきことを古訓点資料等より論じたもの。武智雅一氏「「あともふ」攷」（愛媛国文研究三号、三月）はこの語が家持までで絶えたとの論。又服部嘉香氏「言霊観の真意義」（国文学研究九・十合併号）は、従来の言霊に関する説に疑問を提出、太田善麿氏「「言霊」考」（東京学芸大学研究報告五集、十二月）は、万葉の言霊信仰がそれ以前の時代と違ふと論じた。

小嶋孝三郎氏「国語擬声語の原始形態」（論究日本文学創刊号、七月）は上代語を資料として分類をしたもの。雑誌「言語生活」八月号の「語源」特集には柳田国男氏「日本語のふるさと」新村出氏「語源知識と語源意識」大野晋氏「語源を調べる」がある。就中大野氏のは新見も多く見える。又、原田芳起氏「かつ・かつがつ・かてに考」（樟蔭文学六号、十月）はこれらの語が語源的に一系のものであるとし、「かつがつ」はこれから展開すべき全体に対してそのはじめを示すものとする。津留繁雄氏「万葉集に見られる数詞に就いて」（不知火七号、六月）がある。

文体論関係では、シナの諸書との比較討究で近来大いに論じて居られる小島憲之氏の論考が多い。「万葉語の解釈と出典の問題」（万葉集大成訓詁篇上、八月）「古事記のねらひ」（国語国文、一月）、「失はれた柘枝伝」（人文研究、四月）、「訓読の窮屈さ」（訓点語と訓点資料三輯、十二月）などがある。何れも上代文献に豊富なシナ文献の裏付けのあることを実証されたもの。古賀精一氏「古事記の「白」「曰」両字について」（国語国文、八月）は、この二字の使ひ分けが作中人物の上下尊卑の関係を反映してゐることを実証した。又西田長男氏「古事記の仏教的文体」（大倉山学院紀要一輯、十一月）は神田秀夫氏の論文の批判を含み、万葉仮名の用法は漢訳仏典より来たとするよりも百済帰化人等の用法からの流入とし、又、「所以～故」のやうなインド特有の発想法を取入れた所を指摘されたもの（続篇、三十年二月の「芸林」所載）。又、「国文学解釈と鑑賞」八月号には小島氏「古事記の歴史性と文学性」、神田氏「古事記の文体」の二文がある。日本書紀の用字法につき山田英雄氏「日本書紀各巻の成立と助字法」（史学雑誌、二月）「日本書紀の文体論について」（同、六月）がある。

上代語の研究資料としては、平凡社の「万葉集大成」本文篇が完成し、又索引篇も続刊された。何れも「万葉集総索引」の複刻だが、小型に縮写して索引にも国歌大観番号を入れ、本文篇には解読文をも列記したので大変便利なものとなった。又平凡社「書道全集」（九巻、日本大和奈良、十二月。十二巻、日本平安Ⅱ、七月）河出書房「定本書道全集」（九巻、三筆三蹟とその時代、六月。十四巻、平安時代㈠、八月。十六巻、平安時代㈡、十一月）は、以前出版されて今日では手に入れにくくなった写真に、新資料も添へて多く収め、最新の学説による解説を附し、有益である。

三、中　古

中古関係では、訓点語研究が盛であった。主として中世以前の漢文の古訓点の研究者の全国的学会である「訓点語学会」が誕生

したが、この学会はかねて春日政治博士・遠藤嘉基博士等を中心として企劃されてゐたものが、この年になって実現の運びに至ったのである。六月に京都大学で創立総会で第一回研究発表会を兼ねて開かれ、又、第二回研究講演会が十一月に奈良東大寺で催され、夫々訓点語関係の論述があった。機関誌「訓点語と訓点資料」はこの年中に第三輯まで発行された。特殊な文字や記号が多いので謄写印刷としてゐる。掲載内容は資料紹介が主であり、第一輯(四月)に「聖語蔵及び東大寺蔵本地蔵十輪経元慶元年点本に見えたる字音資料(稿)」(中田祝夫氏)、「聖語蔵辯中辺論天暦点」(築島)「天理図書館所蔵妙法蓮華経巻第四院政期点」(広浜文雄氏)「高野山光明院所蔵蘇悉地羯羅経のヲコト点」(曾田文雄氏)「唐招提寺本金光明最勝王経の白点」(稲垣瑞穂氏)「西大寺蔵本護摩蜜記長元八年点の訓読文」(小林芳規氏)の紹介があり、第二輯(八月)には「聖語蔵御本四未曾有経試読」(春日和男氏)「聖語蔵御本唐写大乗阿毘達磨雑集論調査報告その二」(鈴木一男氏)「東大寺図書館蔵本成実論天長点(上)」(稲垣瑞穂氏、同誌三輯に(下)あり)「遊仙窟四本丁数行数対較表」(水田紀久氏)「訓点語彙」(高野山光明院所蔵)「薩悉地羯羅経寛弘五年点、曾田文雄氏)「訓点資料刊行本目録」(築島)を収載。又論述文も「図書寮本類聚名義抄出典攷」(吉田金彦氏、二・三輯)「地蔵十輪経元慶点の識語」(若林重栄氏、従来「元慶一年」と解読されてゐたのは七年が正しいことを論ず)及び前記小島氏の論考がある。資料には貴重古典籍刊行会から「真福寺蔵遊仙窟」(一月、神田喜一郎氏解説)「東北大学蔵史記孝文本紀」(六月、武内義雄氏解説)が複製刊行。訓点研究では、中田祝夫氏の大著「古点本の国語学的研究総論編」が出た(六月、講談社)。別冊とも千三百頁に及ぶ大冊であって、序文に春日政治博士が絶賛せられてゐる通り、従来の訓点研究に一時期を劃したものである。訓読の創始から始めて、ヲコト点の系統分類、それに基づく一元論、各系統と教学諸宗派との関係、片仮名の異体字又その字源の研究、新出の平安初期古訓点資料の論考など、各頁が空前の尨大な資料を基にした新見に充ちてゐる。

この他に、春日政治氏「語彙雑考」(国語学十七輯、八月)は講演筆記で、古訓点の傍訓によって知られる語彙を示して、それによって古代文献の語釈や漢字の訓法を定め得ること、又、それに基づいての語の派生の問題などにも及んで居られる。

又、小林芳規氏「漢文訓読史上の一問題—再読字の成立について—」(国語学十六輯、三月)鈴木一男氏「反読字の成立について(漢文訓読史研究の一)」(奈良学芸大学紀要三巻三号、三月)がある。同様のテーマを取扱ったものだが、鈴木氏は平安初期の資料を詳査し、返読の成立を虚字の連文の逐次的訓読に起因するとされ、又小林氏は後世まで広く資料を見渡して平安中期から再読の形式が固定成立したとするのであって、その論には互に出入があるが、従来全く不明であったこの問題が大いに解明された。大坪併治氏「石山寺本蘇悉地羯羅経略疏天暦点」(島根大学論集人文科学四号、三月)、平井秀文氏「陽明文庫本遊仙窟訳文稿」(福岡学芸大学紀要Ⅱ、四月)は共に資料紹介で苦心の労作である。中田祝夫氏「千百年以前の漢文訓読」(漢文教室十二号、五月)は、「大唐三蔵玄奘法師表啓」や「地蔵十輪経」など平安初期の訓点本を資料として当時の訓法を概観したもの、拙稿「中古漢文訓読文の文構造」(国語と国文学、九月)は、構文上から見た平安時代の和

文と訓読文との比較でこの面から訓点語の性格を窮明しようとしたもの。なほ兜木正享氏「法華版経の研究」（一月、平楽寺書店）は訓読史研究上有益な資料の紹介・解説が多く収められてゐる。水谷真成氏「「頗」字訓詁小考」（大谷学報三十四巻三号、十二月）は古訓点は扱ってないが問題多いこの文字の用法を、漢訳諸仏典や日遠の「法華訳和尋跡抄」などを援用して論じたもの。又、吉田恵氏「「奈何」の語源」（東方学八輯、六月）は古代シナ語の用法の研究だが、訓点にも関係する。

辞書・音義類では上述吉田氏の類聚名義抄研究の外、秋本吉郎氏「倭名類聚抄二十巻本成立考」（国語と国文学、一月）がある。十巻本を二十巻本に増補したのは十巻本の作者源順その人なるべしとの論であるが、論述に飛躍があるやうに受取られる。倭名鈔関係ではなほ丸茂武重氏「倭名類聚抄郷名校異攷」（古典の新研究第二集、十月）もある。吉田金彦氏「倶舎論音義について」（国語国文、六月）は新資料高野山本・金沢文庫本などの紹介。

和文関係を見ると、「平安文学研究」は十四（二月）十五（六月）十六（十二月）の三輯を出した。国語関係では十四輯の宮田和一郎氏「源氏物語須磨の巻「恋しき人」について」は「恋しき人」を我が恋しく思ふ人と解する鈴木・時枝両氏の説に反対して「恋人」の意とするもの。同輯北山谿太氏「源氏物語の語義語法について」は「いもうと」「せうと」「をこづく」「さるは」等数語についての論。十五輯、宮田氏「呼掛の口語」は「こそ」「やや」等の用例を集めての論。奥山省男氏「竹取物語「汝、をさなき人」考」は諸説中ら「不賢人（ヲサナキ）」を取るべしとする。他に高橋貞一氏「しほじり考」、大塚且氏「「匂ひ」「匂ひやか」「花やか」考」、北山谿太氏「「かゞやく妃の宮」「人めきて」など」石村正二氏「源氏物語の用語解釈三題」は「よ人・よの人」「半且円（パンシヤヲムリ）」「よに隠れて」の論、寺田正一郎氏「源氏語法研究ノート」は「もし」「あまり」の研究。外に北条忠雄氏「浜松寝覚の「ことならば」「ことは」」、鈴木弘道「寝覚「しのふかひ」考」、三木孝氏「枕草子語彙覚書――里人すちかふ――」田中重太郎氏「枕冊子「かうてさぶらふ・ここにかうさぶらふ」考」、菊田茂男氏「蜻蛉日記における「わび」」塚原鉄雄氏「卑者に対する敬語――「日本紀をこそ読み給ふべけれ」の解――」青島徹氏「聞きまがはさる――紫式部日記詞章研究――」などがある。十六輯、宮田和一郎氏「応答・肯定・否定の口語」は「を」「さりや」「さかし」「何か」「いな」「いさ」「いでや」などの用例を集めての論。後藤利雄氏「かみにくとをあけて」は脱字説。馬淵一夫氏「しづ心なく花の散るらむ」は「…コトハドウシタコトダロウ」と解する説。国語と国文学三十年一月号所載の論よりも精しいやうである。北山谿太氏「「さるは」考など」は「さるは」が「さるには」の約を本義とするとの説だが尚考究の余地がありさうである。浜千代清氏「「この」小考」は物語で「あの」意にも用ゐたことを述べる。この雑誌所載の主なものは以上だが、この種の語彙考証は、論文の内容の索引でも出来ないと、今後は折角の先人の業績も後人は気付くことが出来ぬやうになってしまひさうである。外に語彙考証中心のものでは宮田氏に「更級日記難語考」（国語学十九輯、十二月）、北山氏に「艶にも凄くも――語義語法の研究――」（国語国文、十月）「「なまめかし」「艶」考」（国語と国文学、十二月）、友松竜太郎氏「古今

和歌集序の「人の心」と「一つ心」について」（東方古代研究四号、九月）、鈴木弘道氏「「沖より」の被修飾語について――源氏物語須磨巻の解釈覚書――」（立命館文学一一四号、十一月）、寺阪美千代氏「こまか・こまやか　紫式部日記源氏物語用語ノート」（樟蔭文学六号十月）、土岐武治氏「堺中納言物語　むしめづる姫君の「いかでわれ」考」（国語研究十九号、六月）などがある。小松登美氏「源氏物語ところどころ」（国語三巻一号二号、四月七月）は「てぐるまの宣旨」「非参議の四位ども」「せうとの顔」他三例につき物せられた詳細な考証である。

又、文法関係では時枝誠記氏「日本文法文法篇」（岩波全書、四月）が出た。この書については別項で詳論されるであろうから、深くは触れないが、文法は古文読解に役立つべきものとしての立場から、平安時代語のみならず上代語までも同列に取扱つてある点が、従来の文法書と異る一つの大きな点であらう。文法関係では青木伶子氏「主語承接の「は」助詞について」（国語と国文学、三月）「移動性動作の目標を示す助詞「へ」について」（国文二号、六月）とがある。前者は「が」助詞と比較してその相違を明らかにし、「は」は次で切れる陳述を要求するものであることを、上代から中世までの資料を広く用ゐて論証したもの、後者は「へ」は、言語主体の心理的中心から遠ざかって行く場合を示すと論じたもの、共に上代から中古にかけてを中心としてゐる。宮坂和江氏「歌集の添書と歌物語について」（実践女子大学紀要二集、一月）は、左註的詞書↓歌物語といふ系列を考へる阪倉氏説に対して、強調の助詞「なむ」が古今集の左註的詞書には用ゐられず、後撰集に至って俄に増すことを言って、歌集の物語性と歌物語とは発生的には二元的で、後に重り合ふに至ったとしたもの。同誌伴久美氏「平安朝散文における「のみ」と「ばかり」について」は類似したこの二語を帰納的に分析してその異同を論じてある。小島俊夫氏「源氏物語における敬語の「加除」」は、切迫した情景の記述では、当然用ゐるべき敬語が省略されることのあることをめぐっての論である。他に、三宅清氏「申したまふの論」（国語と国文学、六月）伊藤和子氏「源氏物語にあらはれた「御覧ぜらる」と「見奉る」」（西京大学学術報告人文四号、三月）同「源氏物語にあらはれた「―奉る」と「聞ゆ」」（同）田辺正男氏「いとやむごとなき際にはあらぬが……の位格に就て」（古典の新研究第二集、十月）塚原鉄雄氏「助動詞「まし」の展開」（明日香路六巻七号、七月）松島典雄氏「副詞「いと」について―平安朝日記文体を中心に―」（国語国文学三号、二月）などがある。伊藤氏の論（後者）は「奉る」は動作を現す動詞に多く付き、公立った文・男の語に多く、「聞ゆ」は心情を現す語に多く付き、女の語に多いことを論じた好論。保坂弘司氏「源氏物語に於ける副詞性修飾語法」（国文学研究九・十合併号、二月）は「に」「の」「と」「て」などを助詞でなく活用形の連用形とする説。

音韻関係では馬淵和夫氏「平安時代末期の母音」（国語三巻二号、七月）はオとヲとは一〇七五年に既に一音となってゐたこと、イとキ、エとエに音韻上の弁別が平安末まであったこと、オとヲ、ア行のエとヤ行のエとは混一してそれ〳〵 wo, ye なったことなどを、悉曇関係の資料に基づいて論ぜられたものである。音韻で、中古に限らず漢字音関係では、馬淵氏の労作「韻鏡校本と広韻索引」（二月、日本学術振興会）が先づ挙げられる。

韻鏡研究に長い間傾倒して来られた氏の業績の一つのあらはれである。広韻索引は康熙字典順で、韻鏡からも引けるやうになってをり、大変便利なものである。韻鏡校本作成の方法については、書評（国語三巻三号の福島邦道氏、国語学十九輯の辻本春彦氏・小川環樹氏）で批判されたやうな点がなくもないが、しかし併載の韻鏡諸本解題や韻鏡研究史考は正に氏の独断場であらう。又、国語学第十九輯（十二月）の入門講座「韻鏡を使う人のために」も馬淵氏の執筆であるが、恰好な解説である。漢字音関係ではなほ藤堂明保氏「中国語音韻論と漢音呉音」（国語学十六輯、三月）あり、北京官話・中原音韻・中古漢語（広韻）等の音韻体系を論じたもの、同氏にはなほ「上古漢語の方言―特に周秦方言の特色について―」（東方学論集一号、二月）もある。

青木孝氏「変体漢文の一用法―「者」（テイレバ）を巡って―」（国語学十七輯、八月）は王朝時代には上句に附して訓むべき呼応の用法と、下句に冠すべき単独用法とがあったこと、テヘレバがテイレバとなったのは鎌倉室町の交なるべきことを論じた、変体漢文史研究の上で新しい業績である。斎木一馬氏「国語資料としての古記録の研究―記録語の例解―」（国学院雑誌、五十五巻三号、十一月）と併せて注意すべき論考であらう。又、前田惟義氏「紫式部日記における「読書の儀」の条について―古記類との比較の一例として―」（国文学攷十三号、十一月）は、実録による究明。

奥重将建氏の著書「院政貴族語と文化の南展」（十月、三協社）は院政時代語と同時代の琉球語「おもろ草紙」との関聯を述べたものだが、論旨は批判せらるべき点が少くないであらう。

新資料覆刻・索引の類では、東大史料編纂所の大日本古記録「御堂関日記」の下巻が出て（三月、吉川弘文館）完結し、「私家集研究」の創刊号（十一月）では「伊勢大輔集」（伝後京極良経自筆本、保坂都氏解説）、「周防内侍家集」（富岡鉄斎旧蔵本、稲賀敬二氏解説）「俊成卿女家集」（宮内庁書陵部蔵の一本、森本元子氏解説）があり、古典文庫では「異本夜寝覚物語上」（金子武雄氏校、十一月）があった。又、「平安文学研究」十四輯には「和泉式部日記」（寛元本、吉田幸一氏解説）、「墨美」（四十号、十二月）に「針切本重之の子の僧の集」（小松茂美、鈴木一男氏解説）があった。又西下経一氏「古今集伝本の研究」（十一月、明治書院）も注意すべきである。又、馬淵一夫氏編「讃岐典侍日記索引」（十一月、著者出版）も総索引で有益である。

四、中　世

音韻では浜田敦氏に「音便―撥音便とウ音便との交錯―」（国語国文、三月）「海東諸国紀に記録された日本の地名等について」（人文研究、四月）、「ハ行音の前の促音―P音の発生―」（国語学十六輯、五月）の三篇がある。第一のは、主に中世末期の種類の資料を基として、当時「う」「い」と書かれた音節の音価は〔ũ〕のやうなものであったらうとの推定等、又、第二のは室町初期朝鮮で記された日本の固有名詞の考証で音韻史上注目すべきもの、第三のは、平安時代から「もも」のやうな音連続（促音）があって、これが〔-pp-〕に変じ、丁度音韻体系の空白部を埋めることになったとの考論。傾聴すべきものであらう。前田勇氏「近古末に於けるバ四・マ四の音便事情管見」（国語国文、九月）は、キリシタン資料を中心に調査した結果で、浜田氏の上述の第一の論文と少異あり、語幹末がウ列音節の場合は、語幹一音節ならば準

文語・口語ともに撥音便、語幹二音節ならば準文語で撥音便、口語でウ音節であり、語幹末がアォエイ各列の音節の場合は準文語便、口語ウ音便という傾向あることを証したもの。又和田実氏「謡本の表記について(上)」(国文論叢三号、十一月)は観世流の版本二種について調査されたものだが、中世の国語音韻研究と関聯深いものである。吉川泰雄氏「近古国語に於ける長拗音「ゆう」と「よう」との相関」(古典の新研究第二集、十月)は中世近世の交における「ゆう」と「よう」との混淆を、文典・古文書等で実証したもの。又、渥見かをる氏の「中世平曲の曲節とその詞章」(紀要—愛知県立女子短期大学—四輯、四月)も音韻史上の参考となる論であらう。

文法では、山田巌氏「院政時代の語法」(岐阜大学研究報告二号、三月)は、当時の仮名交り文を主な資料としての共時論的考察。寿岳章子氏「接頭辞「こ」のもつ問題」(西京大学学術報告人文四号、三月)は抄物等中世の資料では今日ほど固定してゐない自由な造語力を持ってゐたことの実証。渡辺綱也氏「国語史より見たる中世初期—人代名詞を中心として—」(国語と国文学、十月)は一人称代名詞に関して論ぜられたもの。島田勇雄氏「口語資料としての日蓮聖人遺文から—「き」について—」(国文論叢三号、十一月)は「昭和定本日蓮聖人遺文」の俗人に対して消息文を資料として、助動詞「き」の各活用形の上下の接続のしかたについて調査されたもの。又、菅原真静氏「方丈記の修辞的手法—方丈記の文体的研究—」(文学研究五、七月)は対句その他に関する論、和漢混淆文体研究として注意すべきものであらう。又、根来司氏「中世人と中古語—文語研究への一課題—」(国語学十九輯、十二月)は「徒然草」等中世の文語と当時の連歌の伝書の記述との交渉を取扱ったもので、新しい分野の開拓である。

語彙には、山田孝雄氏「増鏡の註釈数則」(語文三輯、九月)があり、「常在霊鷲山」「三味料」等数語について新見が披瀝されてゐる。山田忠雄氏「形容詞スルドシの成立」(日本大学文学部研究年報四輯第三分冊、三月)は、スルドナリからスルドシへの語形変遷の実証。山田俊雄氏「いわゆる湯桶読・重箱読について」(成城文芸創刊号、十月)は中世資料の実例を基にして論ぜられたもの。なほ又、土井忠生氏「天草版金句集附載の五常について」(国語学十九輯、十二月)は天草版金句集等に附載した格言集「五常」についての論考、又、大塚光信氏「本語小考—キリシタン版綴字への一基礎として—」(国語国文、六月)は西欧語の原語を国字に書直した際の方法をキリシタン資料で論ぜられたもの。

資料としては、高羽五郎氏刊行の「国語学資料」は本年は「譬喩尽Ⅲ」「ロザリオの経 一六二三年版ⅠⅡ及び言葉の和らげ」「金句集」の五冊が出た。高羽氏の精密な謄写印刷には何時もながら敬意を禁じ得ない。古典文庫では「良基連歌論集二」(一月)、「和泉流狂言集」(三月、十二月)、「苔衣物語」(四月、六月)、「宗砌連歌論集」(八月)、「室町時代物語」(九月)等があった。その他川副博氏「永仁三年記考証」(史潮五十号、一月)、宮田俊彦氏「金沢学校の劍阿—影考館本日本書紀の奥書—」(茨城大学文理学部紀要四号、三月)、辻彦三郎氏「明月記自筆本の研究」(国学院雑誌五十五巻二号、六月)、近藤喜博氏「日本書紀巻第三紙背和歌」(同誌同巻三号、十一月)、同氏「正伝仮名法語集」(芸林五巻六号、十二月)、浅井了宗氏「文明版「三帖和讃」の成立に関

する諸問題」（竜谷大学論集三四八号、十二月）などは、何れも本来は史学の論文であるが、国語資料の紹介又は研究として、中世の国語研究にも有益な論文であらう。又、後藤重郎氏「中世初期研究文献目録」（国語と国文学、十月）には国語学の文献も含まれてゐるから参考となる。又、野上記念法政大学能楽研究所編「蔵書目録附解題」（八月）は中世近世に亘る資料を多く収載してゐる。

五、近　世

近世では湯沢幸吉郎氏「江戸言葉の研究」（四月、明治書院）の大著が出た。徳川時代後期江戸の言葉についての共時論的考察である。書評には国語学（十九輯、十二月）に松村明氏が執筆したものがある。板坂元氏「「奥の細道」小見」（成城文芸創刊号、十月）は集中の動詞の活用やパヂェス日仏辞書による語釈などに関するもの。その他、杉本つとむ氏「西鶴の用字法覚書」（国文学研究十一号、十二月）、斯林不二彦氏「雑譚浮世風呂（男湯篇）に於ける文末助詞「の・のう」―その特逸価値について―」（国文学攷十三号、十一月）がある。前田金五郎氏に「「小人嶋」考―西鶴語彙管見―」（国語と国文学、八月）、「芭蕉用語小考」（国文学十二号、四月）の二篇がある。資料では古典文庫で「出羽掾正本古浄瑠璃集」（二月）「長者教」（五月）、「人倫糸屑」（七月）、「新可笑記」（十月）等の翻刻があった。

六　国　語　学　史

学史研究は本年も相当盛であった。上田英夫氏「万葉集の訓点について」（学士院紀要十二巻二号、六月）は梨壺五人以来の万葉訓点史の論。緒方惟精氏「清原宣賢の経学」（千葉大学文理学部紀要文化科学一巻二号、二月）は宣賢の生涯の学問の通観。連歌関係では永山勇氏「連歌とテニヲハ―連歌学者におけるテニヲハ説の展開―」（文学部論叢―立正大学―三号、十二月）はテニヲハ論を詠歌と連歌とに分け、良基、宗砌、心敬、宗祇及びそれ以後に分って述べたもの。根来司氏「姉小路式の諸本の系統について」（国語国文、一月）は博捜の資料に基づく労作。金子彦二郎氏「林羅山と白氏文集」（文学論叢三号、十一月）は羅山の文集研究に関して述べる。又間瀬悖氏「契沖の「ア」音種子説」（国文学2、七月）は契沖と悉曇学との関係を説く。富士谷学派については、佐藤茂氏「あゆひ抄における六運の用語例㈢」（国学国文学三号、三月）同氏「「あゆひ抄」の里言における音便表記について」（同誌四号、七月）、竹岡正夫氏「富士谷成章の学問の源流―関係の表現についての研究―」（国語と国文学、一月）がある。岡田正世氏「「和語説ノ略図」の性格」（国語国文学二号、二月）関根俊雄氏「「詞の通ひ路」に於ける文の解析」（古典の新研究第二集、十月）、伊藤慎吾氏「長野義言の「渚廼玉」について」（滋賀学芸大学学芸学部紀要三号、一月）もある。後者は新出の万葉集研究書の解説。和田利政氏「「仮名遣奥山路」における違例の考察」（国語研究二号、三月）、佐藤茂氏「俳諧天爾波抄私見」（文芸研究十八号、十月）、三沢光博「馬場辰猪の「日本文典初歩」に就いて」（語文三輯、九月）石井光治氏「平文編訳「和英語林集成」」（神戸外大論叢五巻一号、四月）もあり、又、鳥居久靖氏「秋水園主人「小説字彙」をめぐって―日本中国語学史稿之二―」は天明に成ったシナ小説読解用辞書の解説。魚澄惣五郎氏「日本における梵学の伝統について―特に慈雲を中心として―」（女子大文学六号、三月）には慈雲の梵学津

梁を主として論じてある。又、雑誌「佐渡」一集（八月）には江戸時代の佐渡方言集「言葉づかひ」の飜刻がある。（一九五五、六、一三稿了）

—東京大学講師—